

## 2024 年度（総合型選抜）AO選抜入学試験

### 文学部 人間研究学域

「国際方式（英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・イタリア語・中国語・朝鮮語）」

---

#### 1. 実施状況

志願者数、合格者数等

学科・学域・専攻	志願者数	一次合格者数	最終合格者数
人間研究学域	12	10	4

#### 2. 第一次選考<ES(エントリーシート)と課題レポート・志望理由書等>

##### (1) 評価ポイント

これまでに培われた語学の能力や国際交流の経験を活かして、①大学入学後は何を行うつもりなのか、②将来的にはどのような人になりたいのか、③人間研究学域での学びとそれらはどのようにつながっているのかについて、明確かつ説得力ある仕方で説明しているかどうかを評価のポイントに据えています。

##### (2) 解答状況

二、三名の志願書には、上記評価ポイント①～③のすべてにわたって高評価が与えられた一方、大多数の志願書では、とりわけ①または③のポイントでの不明確さが目につきました。

#### 3. 第二次選考

##### (1) 評価ポイント

第一次選考と同様、これまでに培われた語学の能力や国際交流の経験を活かして、①大学入学後は何を行うつもりなのか、②将来的にはどのような人になりたいのか、③人間研究学域での学びとそれらはどのようにつながっているのかを、明確かつ説得力ある仕方で説明しているかどうかを主に評価しています。

##### (2) 解答状況

上記評価ポイント上の不明確さを、面接においても克服しきれなかった志願者が目立ちました。

##### (3) 試験（面接）内容

第一次選考における提出書類の内容を踏まえ、主に、大学入学後は何を行うつもりなのか、将来的にはどのような人になりたいのかをあらためて尋ねたうえで、その回答の内容をより深く掘り下げていくような質疑応答を実施しています。その中には、各受験生の語種や興味関心に応じた、語学的な知識やセンスを問う問題も含まれています。

##### (4) 出題（面接）の意図

人間研究学域での学びとの適合性や、大学で求められる主体的・能動的な学びの姿勢が垣間見られるかや、語学的な知識・センスなどを確かめようとしています。

(5) 受験生に望むこと、その他気付いた点

本年度の面接では、質疑応答があまりうまく噛み合わない場面が目につきました。具体的には、面接者の質問に対して、事前に用意してきたであろう回答を吐き出すことばかりに汲々とするあまり、いたずらに長々として要点を得ない回答になったり、面接者の質問の意図にそぐわない回答になったりしていることもしばしばでした。

このAO選抜（国際方式）では、学力考査が課されないだけに、質疑応答を通じて受験生の問題関心を掘り下げることにより、人間研究学域での学びとの適合性を念入りに査定しようとしています。志望理由書に書かれている受験生の問題関心について、これまで受験生本人はどこまで自力で調べたり考えたりしてきたのか。その問題関心の探究を推し進めるには、現状で何が不足していると自覚しているのか。その不足は、大学入学後に人間研究学域での学びを通じて補えるものなのか。面接では、およそこのような視点から質疑応答を繰り返すことにより、受験生の問題関心を深掘りしています。その質疑応答の過程では、受験生の元来の問題意識の曖昧さや、今後の取り組みの姿勢のピント外れが露呈されていくことも多く、そこに至ると、もはや事前に用意してきた回答ではまったく太刀打ちができません。

そのような窮地に立たされてもなお、どうにかしてボールを打ち返してくることを面接者は期待しています。質疑応答によって事前の計画や展望を乱されてもなお、面接者の質問を新たな気づきとして率直に受け止め、その場で考えたり修正したり、場合によっては自らの考えの至らなさを素直に認めたりすることで、面接者とのラリーを続けてくれることを願っています。そうして打ち返されたのはへなちょこボールかもしれませんが、少なくとも、下手にごまかしたり逃げたりすることなく、ともかくも真摯にラリーを続けようとしてくれた姿勢は評価に値します。真摯に対話を続けようとする姿勢は、人間研究学域での学びを進めるうえで、もっとも基礎的な能力となるからです。対話とは、各人が自分の意見や思いを互いに伝え合い、共感し合う（「わたしは違うけどあなたはそう思うんだ、そんな意見もあるんだ、なるほどね」だけで終わる）営みではないはずです。自分自身や他人、ひいてはテキストとも真摯に向き合い、対話する姿勢を身につけてもらえればと思います。

以上